

少年少女
日本文学館

19

大岡昇平

おおおか
しょうへい

中野重治

なかの
しげはる

ほか

母六夜・おじさんの話

habarokuya
ōoka shōhei
ojisannohanashi
nakano shigeharu



少年少女
日本文学館

19

母六夜・おじさんの話

大岡昇平 中野重治

ほか

講談社

大岡昇平 梅崎春生 伊藤 整 中野重治 佐多稲子

少年少女日本文学館 19

母六夜・おじさんの話

講談社 1986

302p 23cm

内容：母 母六夜 焚火 童話 ヒョウタン
クマゼミとタマゴ 風 おじさんの話
キャラメル工場から 橋にかかる夢 水

おおおかしうへい うめさきはるお いとうせい なかのしげはる さたいねこ

少年少女日本文学館
第十九卷

母六夜・おじさんの話

定価 一四四〇円
(本体 一三九八円)

一九八六年 六月 二十日 第一刷発行
一九九〇年 三月 十二日 第六刷発行

著者……………大岡昇平 中野重治 ほか

発行者……………野間佐和子

発行所……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二二一

郵便番号 一一二

電話 東京 (〇三) 九四五一一一 (大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

製本所……………黒柳製本株式会社

◎大岡昇平 梅崎春生 伊藤貞子 緩目卯女 佐多稲子 一九八六年

落し本・乱し本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえます。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部あてにお願いいたします。

も
く
じ



大岡昇平
おおおかしょうへい

母.....9

母六夜.....47

焚火.....61

童謡.....89

梅崎春生
うめさきはるお

ヒヨウタン.....153

クマゼミとタマゴ.....158

伊藤整
いとうせい

風.....165



中野重治
なかの しげはる

おじさんの話
おじさんの話 187

佐多稲子
さた いねこ

キヤラメル工場から
キヤラメル工場から 231

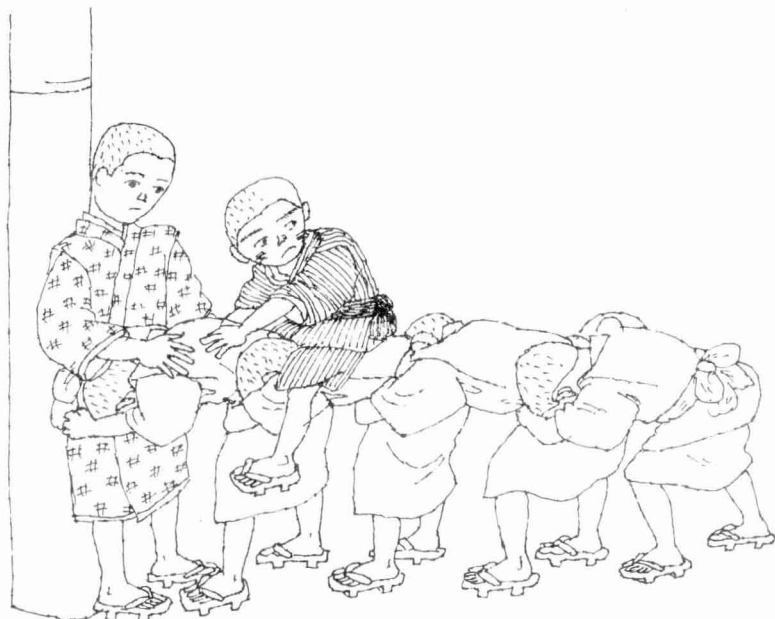
橋にかかる夢
はし にかか る 夢 257

水
みづ 273

解説
かい せつ 284

随筆
ずい ひつ 290

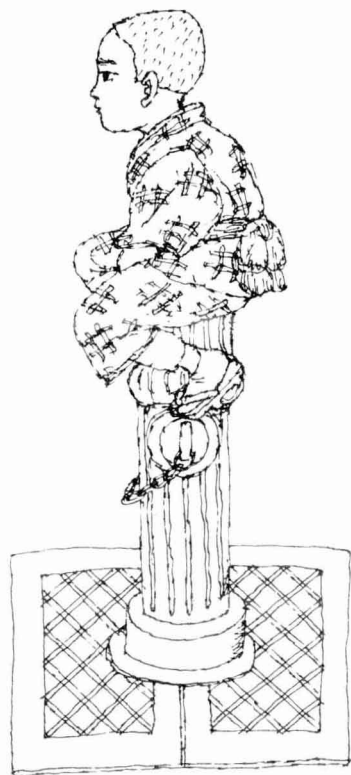
略年譜
りやくねんぶ 296



◆この本の本文表記について

- 現代かなづかい、現代送りかなを使用した。
- 極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。
- 本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。
- さらに説明を必要とする語句や事項には、*をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

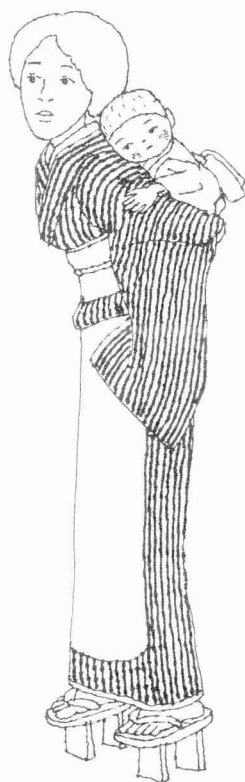
母^は六^や夜・おじ^はさん^{なし}の話



大^{おお}
岡^{おか}
昇^{しょう}
平^{へい}

童^{どう} 焚^{たき} 母^{はは} 母^{はは}
謡^{うた} 火^び 六^む 夜^や

謡^{うた}
(『少年^{しょうねん}』より)
(一)



母

母について、私の記憶は三歳に遡る。その頃、家は青山高樹町附近（現在の東京都港区南青山七丁目）の赤十字病院の前にあつた。家の前の原で姉と遊んでいたら、雨が降り出し、母が唐傘を持って来た。それをひろげて地面におき、その蔭で遊び続けることが出来たのだから、随分小さかったのである。

次は渋谷の氷川神社附近の家だ。井戸端で洗濯している母の背に縋って泣いている私である。手が冷たく痛かった。私はしもやけ性で、十四、五になるまで、冬はいつも両手が紫に腫れた。腫れは、手袋をしても、火鉢であたたためても、引かなかった。

その時、私は多分その手を濡らしたか何かで、痛くなったのであろう。母は多分洗濯をやめ、

ぬるまゆ 温湯かなにかに漬けて、あたためてくれたであろう。しかしその記憶は落ちてゐる。冬の陽光のなかで、むこう向きに蹲った母の背へ、泣きながら近づいて行く、やるせない思いしか残っていない。

この痛い手の記憶は、直ちに十歳のある雪解けの朝、登校の途中転んだ記憶につながる。着物と袴を泥で汚した私は、家へ帰って叱られるこわさと、遅刻するこわさから、自分で始末しようと思った。まず手を洗おうとしたが、あたりに水はなかったので、路傍の掃き寄せの雪を掬って揉んだ。しかし手はちっともきれいにならないばかりか、凍った雪粒が手一杯にひろがって、ひり刺すように痛んで来た。私は泣きながら家に帰った。意外にも私は叱られなかった。母は私の手を温湯に浸し、着物も袴も、他所行きのものに着替えさせ、遅刻の理由を述べた手紙を持たせて送り出した。

この頃家は同じ渋谷でもずっと北の、＊おおむかいしやうがつこう（九三ページ） 大向小学校（現、東急デパート本館）の附近に越していた。一体私の家は、あらゆる東京の移住者の例に洩れず、よく越した。渋谷の中でも、赤十字病院前の家から、だんだん北へ松濤の方まで、十年ばかりの間に六度引っ越している。氷川神社の付近では三軒も越した。父は兜町の株式仲買店の、始終損ばかりしている外交員で、家は貧しかった。

唐傘

竹の骨に紙をはり、油を塗った
雨傘。番傘・蛇の目傘など。



兜町の株式仲買店

株は会社などの資本の出資額に
応じた権利の持ち分。その売買
の仲立ちをする店を仲買店（現
在の証券会社）といい、東京都
中央区兜町に東京証券取引所
がある。

さら

細かく割った竹を束ねたもの。
飯びつなどを洗うに使う。



た。

大向の家ではじめて門があった。私はそれが自慢で、学校から帰ると家の前に立って、人が通るのを待っていた。来かかると、二、三間前を歩いて、ずっと門を入れて見せた。「俺は門がある家の子供だぞ」というわけであるが、通行者はこの重大なる事実には、あまり興味を持たないらしいので、二、三度でやめてしまった。

通行者をもっともであった。門といっても平凡な借家の両側の押し開け門で、玄関まで一間しかない。しかしそれまでずっと、格子戸の玄関が道に接した家で育って来た私には、ひどくえらくなったような気がしたのである。

母は私と違ってひび性で、かな気の多い郊外の井戸水を使うため、冬は指先がささらのように割れてしまう。夜、母がその割れ目に、焼け火箸でとかした黒い薬を流し込むのを、私は息を詰めて眺めた。

両親は和歌山市から出て来たばかりで、付き合いの範囲も少数の

どうけんじん　同県人に限られ、今から思えば寂しい家であった。姉は和歌山市の母方の大叔母の家へ養女に行き、私が八歳の年まで弟が生まれなかったのも、私はしばらく一人っ子であった。

親類は父の兄が麻布にいただけであった。伯父も父同様兜町の仲買店に勤めていたが、家は私の家より立派であった。同じ借家でも、二階があり、庭に池があった。食べ物についても、あれを食べてはいけない、これを食べてはいけない、そんなに食べすぎては毒だ、とはいわれなかった。七つ上の従兄と、五つ上の従姉がいて、泊まりがけで遊びに行くのが、私の休暇中の楽しみの一つであった。

母に連れられて行った時のことである。市電（とその頃はいった）から降りようとすると、車掌に呼び止められた。

私の電車賃を払えというのであった。母は私の齡を一つ下、つまり無料の最大限にいったが、私は元来大柄で齡より上に見える。車掌は直接私に問い糺した。私はまごつき本当の齡を答えたので、乗客の注目の中で、母は電車賃を払わされた。

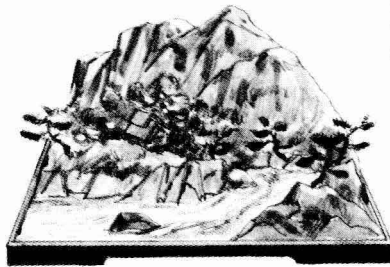
電車を降りると、母は私をこわい眼で睨み、腕をつねった。そして伯父の家へ着いても、このことをいってはいけない、といった。

市電

市営電車。現在の都電。当時、東京は市であつた。

箱庭

小さな箱の中に土や模型などを配置し、庭園などに似せて作ったもの。



煙管（一五ページ）

刻みたばこをつめて吸う用具。



私は大きな衝撃を受けた。嘘を吐くなどは常々母の教えるところである。その教えに忠実だった私が、どうしても叱られねばならぬのだろうか。なぜそれを隠したりしなければならぬのか。

私はしかし子供心に、こうして不合理に叱られねばならぬのが、子供の半額の電車賃も節約しなければならぬほど、家が貧しいためであることを、漠然と感じた。

母はいつも私に優しくしたが、時々理不尽な叱り方をする事があつた。今の渋谷駅裏附近の家にいた時のことである。母はたしか腸の病で、二カ月ほど入院した。入院 中家には母と同じ年配の女が来て、家政を見ていた。たしか京都の人だとかで、色白で小肥りの、今思い出しても、ちよつと綺麗な人であつた。その人は母が退院しても、しばらく家にいた。退院した母は奥の八畳に寝た切りであつた。

狭い庭の一部に私は箱庭を作つていた。家や橋や蟹など、こまご

まと並べるものの中に石碑が混じっていた。私が土を盛り苦心して真っ直に立てようとしていると、後ろで不意に母の声が出た。

「昇平、何してるんですか」

振り向くと縁に母が立って、こわい顔で見下ろしていた。何でおこられるのか、さっぱりわからなかった。混乱して黙っていると、母は重ねていった。

「墓を建てて、お母さんを呪い殺そうっていうんですか。さっさと捨ててしまいなさい」

七歳の私が呪うなどということを知っているはずがない。第一これは墓ではない。私は弁解したかったが、母の語調に押され、「はい」と答えて、その買いたての玩具を裏の川へ捨てに行った。今思えば母は長い病床にある妻の気分から、子供に当たったのである。

私は父が母の留守中家政を見に来た人と関係があったのだと思っている。後、家に女中が二人、三人いるようになってから、父はよく彼女達に手をつけた。父の手のついたことは、女中が勝手に自分の副食を作ることでは知られた。

「ほらまた誰それやが、台所で卵を割るようになったよ」

と姉と話し合ったものである。